

# 中国における「馬」の文化と「船」の文化

福 永 光 司

京 都 大 学

今日は「馬」の文化と「船」の文化というテーマでお話しさせていただきます。身近な例をあげますと、江戸時代の後半期の学者、本居宣長（1730-1801）はもともと伊勢平氏の末孫で、これは「船」の文化の影響を受けた一族といえます。

しかし、彼は二十代のときに五年半京都に留学して、今の京都の四条烏丸を少し南に下がったところに下宿して、そして京都の平安時代からの儒教経典解釈学という学問を勉強しました。儒教経典解釈学というのは、これは基本的には私の言う「馬」の文化です。江戸の徳川幕府はやはり同じように朱子学を中心にした儒教を採用しています。この儒教は、中国の明の時代には、ヨーロッパの大砲と軍艦の攻勢におされて鎖国政策をとりますから、それをまねて幕府も攘夷の政策をとる。それに対して本居はやはり同調するという、江戸と京都の両方に折り合いをつけるという格好で、「馬」の文化を主流としたとみることができます。

特に、本居宣長は六十七歳のときに『馭戎概言』という書物を著します。これは有名な皇国史観の皇国という言葉を使って、日本は皇国であり、日本民族こそ中華である。もともと中国の儒教が強調した、世界の文明の中心を意味する中華というのは日本のことである。その証拠に『古事記』では天照大神、つまりお日さまはこの日本列島で生まれている。橘小門の阿波岐原でイザナギノミコトが目を洗ったときに左の目から生まれたのが天照大神であるから、お日さまは日本で生まれた。日本は日の本である。したがって、すべての朝鮮、中国、それらは皆、戎（えびす）である。日本が中華であって、そのほかは戎であるという儒教の中華思想をそのまま取り入れて、世界の文明の中心は日本である。したがって日本の指導に従わないものはすべて征伐すべきであるという馭戎の主張ですね。馭戎の馭は馭者の馭で馬偏に又という字を書いてありますから、その字だけを見ても、これは「馬」の文化であるということが一目でわかります。

それに対して、「船」の文化の長い伝統を持つのは大阪、難波ですが、その「船」の文化の側から批判と攻撃が始まります。

大阪の藤貞幹という学者、それから皆さんご存知の『雨月物語』の上田秋成。上田秋成は本居宣長よりも四歳下で、賀茂真淵の同じ国学の弟子だったわけです。同門の弟子だったのですが、宣長が京都へ留学し、江戸幕府と妥協して「馬」の文化の立場をとるに従って、「船」の文化の立場から反対して猛烈な論争が起こります。そして上田秋成、藤貞幹、それから与謝蕪村といった当時の大阪の「船」の文化を代表する人々は、本居宣長を井の中の蛙。井

の中の蛙というのは『莊子』という書物の中に書かれている、自分だけを賢いとして見渡しの狭い人間、これを井の中の蛙と呼んでいますが、本居宣長こそまさに井の中の蛙である。日本列島を東アジアの中に正しく位置づけて、そこで本当の歴史を勉強するということを彼は知らない、とって批判する論文を書く。すると本居宣長は、藤貞幹、上田秋成、与謝蕪村、これらを「狂人」とののしって、全然学問のわからない気違いだと呼び、何度も論争を繰り返します（拙著『タオイズムの風』38〈秋成、宣長の「皇国」を論破〉を参照）。

その本居宣長を井の中の蛙として、もっと広い世界に目を開け、今の言葉で言えば、東アジアの中に日本列島を位置づけて、日本人とはそもそも何者なのか、日本文化とはそもそも何なのかという問題を真剣に考える人々が当時すでに居たことに注目したいと思います。

現在、八十一歳の私は、小学校の頃から日本民族は単一民族で、日本文化は神代から独自のものであるというふうに教育を受けて、海を渡り大陸の戦場に送りこまれました。五年ほど軍隊と戦場で過ごしました。

ただ、私が行ったのは中国の南の方で、当時の言葉では南支という華南地区で、しかも私はその南支派遣軍の師団長の専属副官、士官学校出でもないのに師団副官をやらされました。終戦後も、中国側から任命された日俘善後連絡所員として各地から広東に送られてくる、多いときには数千人の日本人将兵の食糧を準備するという、そういう仕事をしておりました。中国政府の蒋介石さんや何応欽さんは日本の陸軍士官学校の卒業生でしたからその点は良かったのですが、広東は非常に日本人に対する感情が激しいところでしたから、いろいろと苦労しましたけれども、ただ戦後は非漢民族の、いわゆる少数民族の人たちが、食糧をいろいろと準備したり運んでくれたりして大変協力をしていただき、彼らと一緒に食事をしたり、船の中でごちそうしてもらったりしているうちに、彼らがお祀りしている神様だとか、いろいろな生活の中の思想、信仰と関連するようなものも目の当たりに見せていただきました。

それで、上述のように藤貞幹、上田秋成、与謝蕪村らが本居宣長と皇国・馭戎の問題を中心に激論をしますが、後者は日本民族絶対で、神代から日本独自の文化を持つという方向で問題を考えていく。しかし前者はそうではなく、海原（船）の文化が東アジアの沿海地域では全体として共通するものを多く持つと考え、私が広東地区の現地で見えたものも、その一例ではないかと思われました。

私はまた一九八八年、天安門事件の前の年に、外務省に頼まれて日本学研究センターの教授として北京に赴任しました。北京では一九八八年の終わりまでに天安門事件は必ず起こるといふ中国の友人たちもおりまして、ちょうど中国の国営テレビで「河殤」すなわち黄河文明の死を悼み嘆くという題の連続テレビドラマ、日本で言う大河ドラマが軍部から抑えられて途中で放映禁止となりました。しかし「河殤」のシナリオは北京でなんとか手に入れることができ、その内容もあらまし理解することができましたが、それはまさに本居宣長と藤貞幹、上田秋成、与謝蕪村の三人が激しく論争をしたと同じ問題で、やはり「馬」の文化と「船」の文化の対立というふうに整理することができます。中国の浙江省から福建省、広東省、海南島、それから広西省、ベトナム、インドネシアなどの海岸地域には、司馬遷の『史記』によりますと、「百越」すなわち百種類の越族が住んでいたというふうに書かれております。そして最近の中国南

方の廈門大学や浙江省の大学を訪ねて教授の人たちといろいろ話しをしておりますと、その中の一人が、『魏志倭人伝』の倭人というのは、言うまでもなく中国語で、その倭人は百越の一種である」などと言っておられました。それで私も日本に帰りましてから、やはり南の「船」の文化、海原の文化、これは要するに黒潮の文化が基本になっているわけですが、その「船」で代表される文化と、それから先ほどの千田教授のお話にもありました日本の天皇家、将軍家が積極的に取り入れた大陸の「馬」の文化、その両方が共存し、混在していると考えようになりました。

中国古代の文化を南方の「船」の文化と北方の「馬」の文化、いわゆる南船北馬として解説することは、西暦前一三九九年にその成立が確認される『淮南子』の中にこの記述が既に見えています。そして南方の「船」の文化は、その後、老荘道教の思想信仰と結合を緊密にし、北方の「馬」の文化は儒学儒教との結合を緊密にしていますが、私としてはこのような古代中国の「船」の文化と「馬」の文化とが、同じく古代日本の文化、特に思想信仰とどのような関連、影響関係を持つのかといった問題、さらにはその文化の担い手である日本人とは、そもそもいったい何者であるのかといったような問題を考えていきたいと思っております。

私の関心は、あくまで日本文化とは本来的にどのようなものであったのか、またこの文化の担い手である日本人とは本来的に何者なのかを明らかにしていくことにあり、そこから中国文化ないし中国人との関連、影響関係を検討考察していこうとするのでありますから、そのような観点で先ず中国古代の「馬」の文化を6点セットに整理し、6点のそれぞれが、いつごろ、どのようにして日本列島に伝えられたのか、そのことを記録する文献史料を列挙するプリント資料（一）〔「馬」の文化6点セット〕をお手元に配布しておきました。時間の関係上、その資料を読みながら簡単な説明を加えることに致します。

「馬」の文化6点セットの（1）は、騎馬戦法の導入による中国全土の軍事的統一。中国の古代では漢民族の戦争の仕方は基本的に歩兵戦闘。しかし北方騎馬民族の匈奴と戦ってしばしば敗北。漢の武帝が騎馬戦法を積極的に導入して中国全土の軍事的統一によりやく成功。その成功を踏まえて、（2）は儒教＝治国平天下の教学体系＝による万民の政治的統治。『周礼』天官大宰職にいわゆる「群臣ヲ馭シ、万民ヲ馭ス」の「馭」（統治）は典型的な「馬」の文化。その（3）は儒教独尊体制の確立と儒者による「王権神授」の理論構築（董仲舒の天人相関理論など）。その（4）は天下太平の実現を上帝（天主・太一神）に報告する「封禪」の神僊信仰（拙著『道教思想史研究』6〈封禪の祭祀と神僊信仰〉を参照）。『漢書』礼楽志に載せる漢の武帝の太初四年（101 B.C.）、「宛馬（大宛国の天馬）を獲て作った郊祀歌」「閭闔ニ遊び、玉台ヲ觀ル」が武帝の神僊信仰を最も如実に表現しています。

以上（1）から（4）までの主役は漢の武帝（在位は140-87 B.C.）であります。わが日本国でこの武帝をモデルとし、上述した「馬」の文化4点セットの導入に主役として活躍されたのは、七世紀の後半、甲斐の騎馬軍団を掌握して壬申の乱の勝利者となられた天武天皇（在位は673-686）です。天武天皇は漢の武帝の時に作られた『史記』を真似て『古事記』の編纂を企画され、武帝が后土の祠を「望拜」したように、壬申の乱の時、天照大神を「望拜」されています。その神僊信仰は「朱鳥」の改元、「瀛真人」の称号などによって最も良く実

証されます。文献としては『史記』『真誥』それに『日本書紀』や『古事記』の序文など（詳しくは拙著『タオイズムの風』付録「タオイズムから見た壬申の乱」を参照）。

(5) は北魏の太武帝（在位は424-452）による「源氏」制度の創設。この「源氏」制度を日本国に導入したのは、平安初期の嵯峨天皇（在位810-823）。文献としては『魏書』源賀伝、『三代実録』貞観五年（863）正月の源朝臣定の薨伝など。(6) は唐の太宗（在位は626-649）の「八幡」軍神（いくさがみ）の信仰。文献としては『唐太宗李衛公（李衛公は李靖。太宗に激賞された騎馬戦法の名将）問対』巻中に「破陣楽舞ノ八幡」として見え、この八幡の神格化された八幡大神は、室町時代に書かれた『八幡宇佐宮御託宣集』巻六によれば、天平二十年（748）九月一日、「古（イニシエ）吾ハ震旦国（中国）ノ靈神ナリシガ、今ハ日域（日本国）鎮守ノ大神ナルゾ」と託宣されたとあります。

次に「船」の文化について説明します。これは黒潮がジャワ、スマトラの海域から東北流して中国の寧波、舟山群島を過ぎたあたりから対馬海流となって日本海に入り、津軽海峡を経て太平洋のほうに抜け、三陸海岸、鹿島灘、房総半島沖合から南太平洋の海域に連なっていくわけです。日本海に入った最初の「船」の文化の上陸地が島根半島ですね。『古事記』にも「八雲立つ出雲八重垣妻ごみに」と歌われておりますけれども、八雲という言葉はもともと中国の南方で六世紀の頃に書かれた道教の古典『真誥』に初めて見える中国語です。ですから『古事記』の神話の部分というのは、「馬」の文化の影響もありますけれども、圧倒的に「船」の文化の影響が大きいですと言えます（拙稿「古代日本と中国文化－『古事記』神話の〈生〉と〈死〉を中心に」を参照）。

「船」の文化に関するプリント資料（二）〔「船」の文化9点セット〕の見出しの下に注記しておきましたように、船（舟）は河川江海の「水」の文化と密接な関係を持ち、特に海は老荘の思想哲学では、「道ハ淵測乎（エンエンコ）トシテ海ノゴトシ」（『莊子』知北遊篇）のように、しばしば「道」に譬えられますから、船（舟）の文化のなかに海と老荘の道をも含め、すべて9点セットとして整理しました。ちなみに船（舟）を譬えとして「道」を説明した中国哲学の文献としては、プリント資料（二）にも挙げておきましたように『莊子』列禦寇篇の「(有道者ハ) 汎（ハン）トシテ繫（ツナ）ガザル舟ノゴトシ」、同じく山木篇の「(船モテ) 海ニ浮カビ、独り道トトモニ大莫ノ国（大イナル寂漠ノ世界）ニ遊ブ」、曇鸞の『浄土論註』巻上の「易行道（イギョウドウ）トハ（中略）譬ヘバ水路ヲバ船ニ乗レバ則チ楽シキガ如シ」などがあります。

「船」の文化の特徴として9点セットに私が整理した第一は、「水」の哲学すなわち「上善ハ水ノ若（ゴト）ク（中略）水ハ道ニ幾（チカ）シ」（『老子』第八章）などに根柢を支えられていることです。十六世紀の後半、私の郷里、豊前の中津に藩主として居住した黒田孝高（よしたか）は、晩年に隠居して如水と号しましたが、日本の戦国武将の読んだ『老子』のテキストは河上公注本であり、これは若水（王弼注本）を如水に作っていますから、黒田の如水も『老子』に基づくと見ることができます。

第二は「道は母なり」です。『老子』（第二十五章）にも「物有り混成シ、天地ニ先ダチテ生

ズ、(中略)以テ天下ノ母ト為スベシ。吾レ其ノ名ヲ知ラズ、之ニ字(アザナ)シテ道ト曰フ」とあります。道を女性と見るのは、お天道さん(日輪)を女性と見るのと同じく「船」の文化の特徴です。

第三は「道は無なり」。『老子』第四十章「天下万物ハ無ヨリ生ズ」。今、日本で、京都に多いのですけれども、禅宗のお坊さんに「何か字を書いてください」と頼むと「無」の字を書く人が多い。仏教のお坊さんだから「空」と書きそうなものだけでも、「無」という字を書きます。それから京都大学の教授だった久松真一さんの『東洋的無』、その師匠の西田幾多郎さんの『無の自覚的限定』という著書、これも根源的な真理、道を「無」と呼んでいるわけです。「道」を「無」としてとらえるのです。

しかし、この「無」はナッシングではないのです。英語に訳すればノンビーイング。目や耳の感覚、知覚でとらえることのできない何物かであるという、その何物かを「無」として表現します。

第四は「道は無為自然なり」。『老子』に「道ハ常ニ無為」(第三十七章)、「道ノ尊キハ(中略)常ニ自然」(第五十一章)とあり、『莊子』繕性篇には、「之ヲ為スコト莫(無)クシテ常ニ自然」とあります。わが国で浄土真宗が最高の教典とする漢訳『佛説無量壽経』にも「彼(カ)ノ佛国土ハ無為自然」「無為自然ニシテ泥洹(ナイオン=涅槃)ニ次(チカ)シ」などとあり、既に引用しました『浄土論註』の「易行道トハ(中略)譬ヘバ水路ヲバ船ニ乗レバ則チ楽シキガ如シ」と同じく「船」で代表される文化です。

それから五番目は「道は愚なり」です。これは浄土真宗の愚禿親鸞の「愚」に通じます。愚禿という言葉は『教行信証』の「信」の巻に見えています。親鸞の鸞は『浄土論註』の著者曇鸞の鸞をとりました。『老子』第二十章に「我ハ愚人ノ心ナル哉、沌沌タリ」とあり、『莊子』天運篇には「愚ナルガ故ニ道ナリ」とあります。道を賢としてとらえずに愚としてとらえる。人間の愚かさ、弱さ、はかなさ、それにじっと目を据える。本当の賢はおのれの愚を自覚することである。そういう哲学の流れがアジアにあります。「船」の文化はそれを代表しているわけです。

それから六番目が「道は渾(混)沌なり」です。渾沌は『莊子』の言葉です。京都大学の理論物理学の教授でノーベル賞をもらった湯川秀樹さんの追悼文を同じくノーベル賞をもらった朝永振一郎さんが書かれて、湯川さんを「混沌を愛する人」と呼んでいます。また湯川さんが三十代で書かれた『極微の世界』も『莊子』の「気」と関係します。極小の世界、限りなく小さなものの世界。これは後に素粒子と湯川さんは呼ぶのですけれども、その素粒子は『莊子』の「気」に相当すると見ることもできます。「人の生は気の集まれるなり。集まれば生となり、散ずれば死となる」(『莊子』知北遊篇)。それを踏まえて一世紀の王充というタオイストは、「人の未だ生まれざるや元気の中にあり。既に死すれば、ふたたび元気に帰る」(『論衡』論死篇)と言いました。死とは生まれる前の自分に帰ることだということです。

中江兆民が「あなたの命はあと一年半しかない」という癌の宣告を受けた時に、病院のベッドの上で参考書もなしに書いた書物が『一年有半』と『統一年有半』です。このなかにも死とは生まれる前の自分に帰ることであり、個人の靈魂が死後も不滅であるというのは、誤まりだ

と書いています。彼の漢学の師匠である岡松甕谷は、私の郷里大分県の人です。

それから七番目は「道は気なり」です。ここで「気」と言うのはさきほど言いました『莊子』という書物の中に「人の生は気の集まれるなり。集まれば生となり、散ずれば死となる。」と見えている「気」です。個の命を解き放たれて宇宙の大きな気の流れの中に帰っていくこと、この宇宙の大きな気の流れこそが本当の意味での永遠の生命であると老荘の生命の哲学は説きます。そして「道は理なり」とする儒教の「理」の哲学に対して道教は「気」の哲学を展開します。なお、「道は気なり」という道教の主張は、五世紀、南齊の張融の『三破論』の中に見えています。

八番目は「道は流れなり」です。老子の場合には、莊子と同じ「道」の哲学を説きますけれども、流れとしてではなくて静かな状態、ひっそりとしたものとして説きます。道元禪師の「身心脱落」というのは老子の哲学の系統の禪です。それに対して臨濟禪の「遊戯三昧」（ゆげざんまい）の「遊戯」というのは、「道」を流れとしてとらえていくという莊子の哲学の系統の禪です。

最後に九番目、「道は場なり」です。この上なく大きなものと、この上なく小さなものが同時に成り立つ「場」を持ち、この上なく賢い者と、この上なく愚かな者が同時に成り立つ「場」を持つという「場」の理論とでもいうべきものです。

唐代の中国では、「場は所なり」という訓詁に基づいて「場所」という中国語が成立します。その言葉を使って、西田幾多郎の「場所の哲学」が展開されます。もちろん中国の哲学だけではなく、ヨーロッパのカントやヘーゲルなど、近現代の哲学者たちの学説、そういったものも取り入れて西田哲学は総合されているわけですが、その中の重要な要素として四世紀の老荘学者・郭象の「場」の理論があります。「小と大と殊なりと雖も自得の場に放てば（中略）逍遙すること一なり」という、これは彼の『莊子』の注釈の中に書かれている文章ですが、原初的な「場」の理論として注目されます。ノーベル物理学賞を受けられた湯川秀樹博士の論文「非局所・場の理論」というのも、私見によれば、この延長線上に位置づけることができると考えられます。

この「道は場なり」という解釈は、五世紀に漢訳された『維摩詰所説経』菩薩品において「衆生ハ是レ道ノ場ナリ」と説かれているように、「道場」という言葉を生み、今は武道場という言葉で柔剣道の勝負の場として残っておりますけれども、こういった「船」で代表される海原の文化9点セットと前に申しました「馬」の文化6点セットを思想信仰という点で比較しますと、プリント資料（三）に番号を打って列挙してありますように、その相違点は一応十三條として整理することが可能のように思われます。今日は時間の関係で充分に説明することができませんが、初めの三條、すなわち（1）のお日さまとお日さまの紅（赤）い色を男性と見るか女性と見るか。（2）の右と左のどちらをより重視するか。（3）の偶数と奇数のどちらをより重視のかなどは、初めに申しました私の中国南方の戦中戦後の現地調査旅行で確認することができました。それから、（12）一方は父系制社会を基盤とするのに対して、他方は母系制社会を基盤にするというのは、主として中国古典学の文献類によって裏づけを行ないました。プリント資料（三）の一番最後のところは、人間の命のふるさと、死後に帰っていく場所を水

平線上に設定するか、垂直線上にするかというふう整理して、それと日本文化の展開を歴史的に関連づけて見ようと思いました。

この国際日本文化研究センターでは、古代日本と中国文化との関係を三世紀から七世紀に限定して、数年間、共同研究を続けてきました。その一応のまとめとして、(一)「馬」の文化6点セット、(二)「船」の文化9点セット、(三)「馬」の文化と「船」の文化の思想信仰としての相違点13条などについてお話ししました。(拍手)

[付記] 当日お手元に配布しました三枚のプリント資料のうち、(一)の「馬」の文化6点セットおよび(二)の「船」の文化9点セットは、それぞれ6点ないし9点の具体的な項目を順番に列挙し、簡単な説明を会場で加えることが出来ましたが、(三)の「馬」の文化と「船」の文化の思想信仰としての相違点13条については、時間の関係上、具体的な項目の全部をさえ挙げる事ができず、説明も極めて不十分でしたので、ここに付録として載せて頂きます。(この13条についての具体的な説明は、拙著『タオイズムの風』付録「タオイズムから見た壬申の乱」の末章「〈馬の文化〉と〈船の文化〉」を参照して頂ければと思います)

#### 「馬」の文化と「船」の文化の思想信仰としての相違点13条

- (1) お日さま(太陽、日輪、円耀)とその紅(赤)色を男性と見るか女性と見るか(『周易』繫辭伝に、「乾ハ陽物」「乾道ハ男ヲ成ス」)、『老子』第一章に「道〔天道〕ハ万物ノ母」〈天道=おてんとうさま〉)
- (2) 右と左のどちらを上位と見るか(『礼記』王制篇「執左道」正義所引の『漢書』に「賢ヲ右トシ愚ヲ左トシ、貴ヲ右トシ賤ヲ左トス」)、『老子』第三十一章に「君子、居レバ則チ左ヲ貴ブ」。
- (3) 偶数と奇数のどちらをより重んずるか(『周易』繫辭伝に「太極ハ両儀ヲ生ジ、両儀ハ四象ヲ生ジ、四象ハ八卦ヲ生ズ」)、『老子』第四十一章「道ハ一ヲ生ジ(中略)三ハ万物ヲ生ズ」。
- (4) 直〔方〕と曲〔円〕のどちらをより重んじるか(『孟子』公孫丑篇に「浩然ノ氣(中略)直ヲ以テ養エバ(中略)天地ノ間ニ塞ガル」)、『老子』第二十二章に「曲ナレバ則チ全シ」。
- (5) 剛〔剛毅〕と柔〔柔軟〕のどちらをより重んずるか(『論語』子路篇に「剛毅木訥ハ仁ニ近シ」)、『老子』第七十八章に「天下ニ水ヨリ柔弱ナルハ莫シ」。
- (6) 賢〔賢明〕と愚〔暗愚〕のどちらをより切実に凝視するか。
- (7) 正邪(ただしい・よこしま)と眞假(ほんもの・にせもの)のいずれをより重視するか。
- (8) 善悪と淨穢〔淨不淨〕のいずれをより重視するか。
- (9) 有為と無為のいずれをより重視するか。
- (10) 因果〔解脱〕と自然〔隨順〕のいずれをより重視するか。
- (11) 秩序〔コスモス〕と混沌〔カーオス〕のいずれをより重視するか。
- (12) 父系制社会を基盤とするか、母系制社会を基盤とするか。
- (13) 万物の生命の原郷(生まれる前の世界と死後に帰っていく世界)を垂直線上(天上世界・天国)に想定するか、水平線上(海原の彼方・常世・西方浄土)に想定するか。

(以上)